

『ロジーナのあした—孤児列車に乗って』 — 19世紀から21世紀へ、大陸横断鉄道がいざなう トランスアメリカン・トランスナショナルな時間旅行 —

伊藤 真利子[†]

RODZINA:

A Trans-American, Trans-National Journey through Time from the 19th
to the 21st Century on a Transcontinental Railroad

Mariko Itou

はじめに

本論文が考察の対象とするカレン・クシュマンの著した『ロジーナのあした—孤児列車に乗って』(2009年、原題 *RODZINA*、以下『ロジーナ』と略記)は、8歳から12歳を対象にするヤングアダルト小説である。カレン・クシュマンは1941年シカゴに生まれ、行動科学と博物館学を学び、いくつかの仕事と子育てを経験した後50歳の時に作家活動を始める。時代背景を丹念に調べ、さまざまな時代の少女の成長をあざやかに描く作風には定評がある(『ロジーナ』カバー裏)とされている。『ロジーナ』は1881年、シカゴの街の浮浪児たちが大陸横断鉄道に乗って西部に送られ、事前に孤児引き渡し場が設けられた町で里親に選ばれていくエピソードをプロットとする。主人公は12歳の孤児の少女ロジーナである。

本論文のサブタイトルを「19世紀から21世紀へ、大陸横断鉄道がいざなうトランスアメリカン・トランスナショナルな時間旅行」とした理由は、19世紀末のアメリカを舞台にする『ロジーナ』の背景にあるアメリカ社会と、21世紀に生きる私たちの社会が近似しているからである。不動の男性中心社会の底辺に生きる人々が描かれる『ロジーナ』は、19世紀のアメリカの社会問題を浮き上がらせるだけでなく、21世紀に生きる私たちがまだ解決できずにいるトランスナショナルな社会問題を想起させる。それは、児童労働、女性差別そして性暴力である。また、トランスアメリカンな大陸横断鉄道の旅程にアメリカの社会発展の歴史を暗示する。歴史の中で変わるもの変わらないもの、幸福と悲劇、私たちはいつも時間旅行の途上にある。

1. 「孤児列車」と「ニューヨーク児童援助協会」

ポーランドに生まれた主人公ロジーナは、2歳の時、両親に連れられてアメリカにやって来る。「ロジーナ」という言葉はポーランド語で「家族」という意味をもつ。シカゴのポーランド街で育ったロジーナは、12歳の時両親が相次いで亡くなり孤児になる。その後、シカゴの街で浮浪児仲間といる時に「孤児援助協会」によって保護され、浮浪児に里親を見つけるために運行されていた「孤児列車」に乗せられ西部へと向かう。19世紀アメリカには、中欧のさまざまな動乱やアイルランドの飢饉によって大量の移民が押し寄せた。彼らは貧窮し、その高い死亡率や高い出生率は大量の孤児を生んだ。さらに親の虐待などで家出した子どもたちも浮浪児となり街に溢れた。浮浪児たちは物乞い、靴磨き、花売り、そして売春婦になり、街の墮落を再生産するものと捉えられた。

1853年、チャールズ・ローリング・ブレイス(1826~90)は、「ニューヨーク児童援助協会」を創設し、浮浪児救済施策の一つとして、1854年から1929年にかけて、後に「孤児列車」と呼ばれる列車の運行を開始した。ブレイスの理念や活動についての先行研究であるStephan O'Connorの著した *Orphan Trains: The Story of Charles Loring Brace and the Children He Saved and Failed* (2001年)によれば、ブレイスは「貧窮し、無援の子どもたちを家庭に託すというシステムは、いかなる最高の施設ケアよりも慈悲深く有効的であり、さらにコストがかからないと述べている」(オコナー xvii)とされる。そしてアメリカにおいて、「彼の観念つまり、子どもたちは、施設よりも、家族による方がよりよい保護を受けられるということは現在フォスターケアのもっとも基

[†]2023年度修了(人文学プログラム)

本的な教義になっている」(xviii)とされる。

1849年、3000人もしくは街の人口の1%近い浮浪児たちは路上に住み、路地や放棄された建物、階段の下以外に寝る場所がなかった(xiv)。当局は1820年代、少年刑務所や保護施設を建てることで対処した(xiv)。しかしブレイスは、「浮浪児救済のために本当に必要なのは、教育、仕事、そして望ましい家庭だ」(xiv-xv)と主張し、彼の慈善活動の主たる目標は、「子どもたちを、チャンスに欠け不道徳な影響が充満しているスラムから移動させ、善良なクリスチャンの家庭に託すこと」(xx)だった。浮浪児たち—列車に乗った子どもたちのうち実際孤児だったのは半分にも満たず25%は両親が2人も生きていた(xx)—が里親を求めて町に来ることは、あらかじめ町の人たちに周知され(xiii)、孤児引き渡し場に集まった人びとは、浮浪児たちに家庭—労使関係を含む—を提供する「代理家族」になることが期待された。

世紀転換期は写真技術が発達し、ルイス・ハイン(1874~1940)やジェイコブ・A・リース(1849~1914)らが「若い大人」たちを映像で残した。またジェーン・アダムス(1860~1935)は、貧民救済に打ち込んだ自らのセツルメント活動を記した『ハル・ハウスの20年』(1910年)で、以下のように述べている。

子どもたちが親よりも英語が上手であり、低賃金でも喜んで働き、かつ両親が子どもたちの働きで食べてゆくことに甘んじてしまって、子どもたちが働いて支える家庭が多いことを、私は知るようになった。(146)

移民である両親以上に英語を話すことのできる子どもたちはアメリカ社会への適応力が高く、産業革命後のアメリカ資本主義社会に労働搾取の対象として吸収されていた。

世紀転換期、社会の最下層で世襲されるのは「犯罪と、犯罪へいたる悪徳や治安を乱す行状」(リース 14)であると人々は考えた。ゆえに貧窮する家庭の子どもたちや街の浮浪児たちは、将来自分たちに立ちだかる災いのもとであると捉えられ、彼らの処遇は喫緊の課題だった。ブレイスが創設、運営し、約25万人もの都会の子どもたちを「里子」として地方へ送った「孤児列車」は、最も有望な解決策の一つだったのだ。

2. 孤児になったロジーナ

19世紀、ポーランドはプロイセンの支配下にあった。1871年、反体制的なパパは「ドイツ人の家主さんの顔を、まともに」(『ロジーナ』55)殴り、その日のうちに一家はアメリカに亡命しシカゴにたどり着く。時は流れ、パパもママも弟たちもみんな死んでしまい浮浪児になったロジーナは「孤児列車」に乗せられる。ロジーナの乗った「孤児列車」の引率者シュプロットは列車の中で以下のように怒鳴る。

ありがたいと思わなきゃならんぞ。まともな服をきて、働いて生きていけるチャンスをもらえたんだからな。おまえたちには、これが最後のチャンスかもしれない。だからおとなしくすわって、神さまに幸運を感謝しなさい。(17)

シュプロットの言う、子どもたちのチャンスとは何だろう。街での暮らしに見切りをつけた子どもたちにとって、「里親」という雇用主のもとに、無料切符で行けることは渡りに船のチャンスだった。オコナーが述べるように、街にいて「あまりにも多くの失望や孤独を知っていた」(xiv)年長の少年少女たちにとっては、少しはましな「あした」にけるチャンスだったのだ。

ラッセル・フリードマン(1929~2018)が著した『小さな労働者』(1996年)には、世紀転換期に児童労働の悲惨さを社会に提示するためにハインが写した「若い大人」たちの映像が載る。21世紀の今も私たちは「児童労働問題」を解決できてはいない。

3. ロジーナの里親探しの旅

ロジーナたち一行は、最初の孤児引き渡し場があるネブラスカ州グランドアイランドに着くと、孤児引き渡し場へ向けて歩き出す。ロジーナが「集まった人たちをさっと見わたすと、……、いかにも農家の人という感じだった」(『ロジーナ』77)。引き渡し場では、農家の仕事を手伝える大きな男の子たちから農夫たちに「次々と選ばれて」(81)いき、やがて不機嫌そうな顔のロジーナの前に、彼女に興味を示す「二人のおばあさん」(82)が現れる。ロジーナは、おばあさんたちとシュプロットの会話を聞きながら、「あのおばあさんたちの家について看護人と料理人と奴隷になるなんて」(84)いやだと考える。そこでポーランド人がいかに面倒で役に立たない人間であるか「ばかげた話」(88)を延々と続ける。「まったく、困った」(88)2人はロジーナを引きとることを止めた。

グランドアイランドで里親が見つからなかった子どもたちを乗せて「孤児列車」は再び西方に向い、ワイオミング準州シャイアンに到着する。シャイアンの孤児引き渡し場で、ロジーナは「集まった人たちの中には、……、ほとんどの人はふさかざりのついた皮の服を着ていて、荒野から町についたばかり、という感じ」(126)と思う。ロジーナの前に、引率の女先生は子供を13人連れた「つるつる頭の痩せた男の人をつれて戻って来た」(130)。クレンチと名乗る男の人はロジーナを「前後左右からじろじろ見た」(130)。里親契約はあっという間に成立し、ロジーナはその後クレンチの子どもたちと一緒に押し込まれた荷馬車に夜どうし揺られながら不吉な予感をおぼえる。明け方、ロジーナは、「動物のすみか」(137)みたいな家に着く。「地面に掘った穴の中」(137)の家を見わたすと、「とつせ

ん、激しいせきがきこえてきて」(137) 振り返ると、「すみのベッドに、女の人が横になっている。髪がほさほさで、やせこけた悲しそうな顔をしていて、骨ばった両手をせかせかと動かしている」(137) ロジーナは「ここはとんでもないところだ」(138) と気づく。

クレンチがロジーナを引きとった理由は「いつ死んでもおかしくないって、父ちゃんもいってる」(143) 奥さんの代わりだった。次の日、「もうじき夕食というころ、クレンチがあたしの腕をつかん」(153) だ。その時、ロジーナを助けてくれたのはクレンチの奥さんだった。奥さんは14歳で結婚させられ、13人もの子どもを次々と産んでいた。「死んだみたいに横になっていた奥さんが、突然立ち上がった」(154) ことにびっくりしたクレンチはロジーナを大急ぎで荷馬車に乗せシャイアンまで送り返す。こうしてロジーナは、孤児選びをしていたホテルに無事戻ることができた。

クシュマンはなぜ、ロジーナが里親から受けた性的虐待(未遂)を描くのだろう。クシュマンは、『ロジーナ』で少女たちが性暴力に対して常に脆弱な存在であるということ提起した。現代も子どもたちは性的虐待の対象になっている。2021年10月7日のJNの記事「33万人のフランスの子どもたち 教会による虐待の犠牲者 (330,000 French Children ‘Victims of Church Abuse’)」には聖職者による長期にわたる性的虐待の報告が載る。重要なのは「転換期」がやっと訪れたという認識であると被害者グループのラ・パロール・リベレ (The Liberated Word) の代表であるフランソワ・ドゥヴォー氏は語る。聖職者による性的虐待に70年もの間、33万人の子どもたちは声をあげることができなかった。「沈黙のとばり (veil of silence)」が上がり再びとがいっせいに声をあげる環境が整う「転換期」が訪れた。それはアメリカの市民活動家が始めたSNSを使って世界中に性的虐待を発信できる「Me Too 運動」が、「セクハラや性的虐待を見て見ぬ振りをするのは終わり」にする「タイムズ・アップ」運動などにつながるなど、SNSなくしては起こり得ないムーブメントだった。

加えて、「加害行為」に対する呼称がついたことが重要だ。「パワーハラスメント」「モラルハラスメント」「セクシャルハラスメント」「ドメスティックバイオレンス」等、これらの皆が「もやもや」と心にもっていた感情に呼称がついて初めて、感情が輪郭や定義を持ち、被害を発言し共有できるようになった。今世紀に入り、SNSにおける「告白」「共有」—性犯罪を訴えやすい環境を作り、その情報を交換する—は堰を切ったように被害者に声をあげさせている。

『ロジーナ』で、クレンチ一家は密室のような空間にいて、夫が合法的な結婚というシステムで妻を性的に隷属させている。次から次へと生まれる子どもたちは学校に行くこともなく、一家は社会からまったく孤立している。強い父権主義社会で、少女たちが身動きのできない結婚という監獄にいれられてしまう悲劇は、21世紀に生きる私たちが

まだ解決できていない女性問題である。

4. 女先生のナラティブ

シャイアンでの孤児選びの後、誰からも欲しがられなかった四人の孤児は「シカゴにもどって救貧院に入り、働いてお金をかせいで生きていくことになった」(『ロジーナ』158) が、女先生は、友だちのいるユタ準州のオグデンで四人の引き取り先を見つめる最後のチャンスに賭ける。三人には引き取り先が見つかり、一人残ったロジーナはサンフランシスコの近くの「青少年職業訓練学校」で「家政婦になるための訓練を受けることになった」(215)。二人きりになったロジーナと女先生は会話を交わすことで親密性を増し、ロジーナは女先生を信頼し好意を抱くようになる。

女先生は、やっと入学が許可された大学の医学部で、他の男子生徒に露骨な嫌がらせを受けながら医者になるが、シカゴではどこの病院も雇ってくれない。当時女先生のように、自立のために教育を受け職業を得ようとした女性たちは激しい女性差別にあった。教育を受けた女性が「男性にとっての脅威」であり、かつ「家族にとっても脅威」になったその根幹には、「19世紀初頭に出現した『近代家族』という新たな家族のあり方」(高橋 174) があり、「男にとっては、個人主義的な競争と孤立の始まりだった。一方、女には家庭的であることが求められた」(174 - 75)。

5. カリフォルニア州オークランド

ロジーナは女先生とカリフォルニアにたどり着く。列車が終着駅であるサンフランシスコに着く前の晩、女先生にロジーナは思い切って「このまま、いっしょにいさせてもらえませんか？ 職業訓練学校へはいきたくありません」(『ロジーナ』253) と切り出す。女先生は「少し苦勞するかもしれないけど、力を合わせてがんばりましょう。パークリーにはあなたぐらいの年の子がいく学校もあるのよ」(256 - 57) と答えてくれた。凍り付いた寒いシカゴの朝に出発し、雨上がりの朝、温かいカリフォルニアにたどり着くことは、二人が人生の難関をひとつ通り抜けたことの象徴になっている。

クシュマンは、『ロジーナ』でなぜ「孤児列車」の旅程を「シカゴ」、「グランドアイランド」、「シャイアン」、「カリフォルニア」にしたのだろう。フレデリック・ジャクソン・ターナー (1861~1932) の論文「アメリカ史におけるフロンティアの意義」(1893年) によれば、アメリカの社会的発展には共通するプロセスがあるという。

- ① 牧場生活の牧歌的場面 (70)
- ② 人口稠密な農業定住地の集約農業 (70)
- ③ 都市と工場制度をもった工業組織 (70)

ターナーは、①→③のプロセスを辿りながらアメリカは社会的発展を続けたと述べている。東部大西洋岸から西方地域への絶えまない拡張・開拓・移住は、最初のフロンテ

『ロジーナのあした—孤児列車に乗って』

— 19世紀から21世紀へ、大陸横断鉄道がいざなうトランスアメリカン・トランスナショナルな時間旅行 —

ニアである大西洋側から大西部へと常にフロンティアを前進させた。そして「アメリカの社会的発展は、フロンティアにおいてたえまなくその開始をくりかえし」(64)、ターナーはその開始のくりかえしを「進化の過程の循環」(64)と呼んだ。

『ロジーナ』にも、「進化の過程の循環」(64)を読み取ることが可能だ。イリノイ州の「大都市」シカゴを発った列車はグランドアイランドに着く。そこでロジーナは孤児引き渡し場で会った人たちを「……いかにも農家の人という感じだった」(77)と思う。シャイアンでは、「ほとんどの人は……、荒野から町についたばかり、という感じ」(126)と思う。ロジーナのナラティブのなかでは、グランドアイランドの人たちは「農家の人」、さらに西に進みシャイアンの人たちは「荒野の人」である。つまり、フロンティアの隠喩である「シャイアン」は集約農業の定住地「グランドアイランド」を経て、都市の隠喩である「シカゴ」へと発展していくのだ。『ロジーナ』で、「孤児列車」の旅は、ターナーが唱えたフロンティアが都市へと発展していくアメリカの「進化の過程の循環」を表象している。

クリスティナ・ベイカー・クライン(1964~)は著書『孤児列車』(2015年)のあとがきで以下のように述べている。

本書の執筆中に、ニューヨークとミネソタでひらかれた、孤児列車に乗った人たちの親睦会に出席し、当事者とその子孫のみなさんから話を聞きました。列車に乗った人はもうあまり残っておらず、存命の人たちもみな九〇歳を超えています。印象深かったのは、その人たちが、お互い同士でも、わたしに対しても、自分の身の上を語りたくてたまらない様子だったことです。その人たちと話をしたり、彼らの体験談を読んだりしてわかったのですが、彼らは相当な困難に直面したけれど、どちらかといえばその点にこだわってはいないようです。それよりも、子どもや孫たちや地域社会に感謝することに意識を向けています—もしあの列車に乗っていなかったら、存在しなかったかもしれない命に。(350)

孤児列車に乗った人たちが語る言葉は、アメリカの不幸な歴史的経験の犠牲者(victim)ではなく、生き残った者(survivor)として、感謝と誇りに満ちている。生き残った者の地域社会への感謝が、フィランソロピストを再生産し、アメリカ社会はフィランソロピーの伝統を脈々と引き継いでいる。「孤児列車」に乗った人たちがその記憶をどう語るか、それはマリタ・スターケン(1957~)が「記憶は解釈の一形式」(26)また「あらゆる記憶は、忘却と対になって『創造されて』いる」(26)と言うように、彼らは困難を記憶に留めるよりも、むしろ感謝することを選び「語りたくてたまらない」物語にした。時の流れは「孤児列車」や「孤児」をステイグマテックな表象と捉えず、む

しろポジティブな表象に変えた。すべての歴史的経験は常にその時代を反映する文化的記憶になっていくのだ。

おわりに

クシュマンの「孤児列車」は、トランスアメリカン、トランスナショナル、そして19世紀から21世紀へと世紀をまたぐ時間旅行に誘う。大陸横断鉄道に乗ってシカゴ、グランドアイランド、シャイアンそしてカリフォルニアへと向かうトランスアメリカンな「孤児列車」のそれぞれの停車駅は、アメリカの社会的発展の段階を表す隠喩になり、「孤児列車」の進行方向はアメリカの社会的発展を逆になぞるものだった。里親のもとでロジーナが体験したことは、21世紀に生きる私たちがまだ解決できずにある社会問題である児童労働、女性差別、性暴力を想起させる。

『ロジーナ』のキーワード「大陸横断鉄道」「19世紀」「孤児」「少女」は、隠喩的空間としての「アメリカ」を構築する。まずアメリカ大陸という果てしない大地があり、その大地を「大陸横断鉄道」に乗せて「孤児列車」で横断させるといふ発想そのものがアメリカ性を帯びている。

「孤児」は、19世紀ヨーロッパから押し寄せスラムに住んだ貧窮する移民の提喩でもある。移民たちは19世紀以降工業国として世界一になるアメリカの経済発展のエンジンになったが、高い出産率や、感染症、事故などによる高い死亡率は大量の孤児を生み、浮浪児は街にあふれた。「少女」は、若い労働者であるとともに、常に性犯罪の対象になるうる社会の一番脆弱な立場にあるものとして描かれる。ロジーナは、西進する「孤児列車」という空間でステイグマ的な昨日をポジティブな「あした」に変えていく。主人公が少年ではなく「少女」であるために、そこにはホレイショ・アルジャー(1832~99)の小説にみられる立身出世的な要素は感じさせない。

クシュマンは『ロジーナ』を著すことで、「孤児」や「孤児列車」のネガティブな表象をポジティブなものに変えた。街の墮落を再生産するものだと捉えられていた「孤児」たちもまた、良い環境の中でなら「あした」を築くことができる。クシュマンは、その昔祖母が墓前で泣きだしたファミリーストーリーにも「あした」を与えた。「大衆によって生み出された、民族の白日夢」(宮本 93)である「孤児列車」は、その中に「孤児」たちの白日夢を内包し、アメリカの文化的記憶になっていった。

謝辞

本論文の執筆にあたり、指導教官として始終多大なご指導を賜った宮本陽一郎教授に深謝いたします。宮本教授には卒業研究の時から、論文の書き方から研究に対する姿勢まで本当に一からご教授いただきました。改めて感謝申し上げます。

参考文献

第一次資料

クシュマン, カレン 『ロジーナの明日—孤児列車に乗って』 野沢佳織訳 東京, 徳間書店, 2009年。

第二次資料

アダムス, ジェーン 『ハル・ハウスの20年—アメリカにおけるスラム活動の記録』 柴田善守訳 東京, 岩崎学術出版社, 1969年。

O'Connor, Stephan. *Orphan Trains: The Story of Charles Loring Brace and the Children He Saved and Failed*. New York: Houghton Mifflin, 2001.

クライン, クリステイナ・ベイカー 『孤児列車』 田栗美奈子訳 東京, 株式会社作品社, 2015年。

スターケン, マリタ 『アメリカという記憶—ベトナム戦争, エイズ, 記念碑的表象』 岩崎稔・杉山茂・千田有紀・高橋明史・平山陽洋訳 東京, 未来社, 2006年。

高橋裕子 「つくられる性差—ジェンダーで見るアメリカ史」 『アメリカの歴史—テーマで読む多文化社会の夢と現実』 有賀夏紀・油井大三郎編 東京, 有斐閣, 2008年。

フリードマン, ラッセル 『ちいさな労働者—写真家ルイス・ハインの目がとらえた子どもたち』 千葉茂樹訳 東京, あすなろ書房, 1999年。

宮本陽一郎 『モダニズムの文学と文化』 東京, 放送大学教育振興会, 2021年。

リース, ジョイコブ 『向こう半分の人々の暮らし—19世紀末ニューヨークの移民下層社会』 千葉喜久枝訳 東京, 創元社, 2018年。

渡辺真治 「アメリカ史におけるフロンティアの意義」 『アメリカ古典文庫—9 フレデリック・ターナー』 渡辺真治訳 東京, 研究社, 1975年。